

---

# 白夜叉再臨

朝露詩奈

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

白夜叉再臨

### 【Zコード】

Z9221Z

### 【作者名】

朝露詩奈

### 【あらすじ】

佐幕とか攘夷とか、しみつたれた武士道になんて興味ない。ただ、己の守るもののために刀を振るうのみ。かつての白夜叉としての自分を封じ込め、万事屋として呑気に働く銀時が、再度白夜叉が刀を振るうとき、地球はどうなる？

「ある依頼人」がきっかけで、再び白夜叉として戦うことを決意した銀時。そんな彼を巻き込む、大事件とは。

## 第零訓 白夜叉降誕（前書き）

まずは、お決まりのあのシーンから始めよう。

## 第零訓 白夜叉降誕

冷たい雨が、2人の男の背に突き刺さる。不吉な厚い雲で覆われた空は太陽がとうに姿を消し、あたりを灰色で埋め尽くしていた。

「はあ……はあ……はあ……」

長い黒髪の男が、刀に寄りかかるように座り込んだ。それに続いてもう1人も、彼に背を向け、膝をつく。

「はあ……はあ……」

荒い呼吸はなかなかおさまらない。頭から出ている血が頬を伝い、口に流れ込む。生臭い鉄の味が、口の中に広がった。

彼は顔をぐいっと上げ、薄闇にかすむ視界の向こうを睨んだ。無数の、赤く妖しい光が、四方八方から彼を睨み返してくる。

みな、敵の目だ。

「……これまでか」

八方塞がり。逃げ道はない。

「敵の手にかかるより、最後は武士らしく、潔く腹を切ろう」

観念して、彼は刀を抜いた。今まで、幾人もの敵から彼を守ってきた、ぼろぼろの愛刀だ。彼はその柄を両手にしつかり持つて、腹に向かた。

しかし、いざ、と刃を押し込もうとしたとき　もう一人の男が、すっと立ち上がった。

「バカ言つてんじやねーよ。立て」

その男は刀を抜き、大胆にも、立ちはだかる敵に向かつてずかずかと歩いていく。

「美しく最後を飾りつける暇があるなら、最後まで美しく生きよう  
じゃねーか」

低く小さく、しかし確実に大きな決意を秘めているその言葉に、心が揺さぶられた。

自分の腹に突き刺そうとしていた刀を、目前の敵に向かってかざしながら、立ち上がる。

2人、背中合わせになつた。

「行くぜ、ヅラ」

「ヅラじゃない、桂だ」

短くそつ言葉を交わしたあと、彼らは互いには目もくれず、ただ友の背中を信じて……まっすぐに、敵中に突っ込んでいった。

その男、銀色の髪に血を浴び。

鬚の男、桂は当時の戦友のことき、そう振り返る。

戦場を駆けめぐらす姿は、まさしく夜叉。

## 第零訓 白夜叉降誕（後書き）

大丈夫なのか、自分。

受験の時期に、なぜこんなことを！？

えーと、普段は沖神専門の私が、頑張つて劇場版を意識した話を書  
こうと決意しました。

更新は遅くなると思いますが、どうか付き合ってくださいませ。

## 第一訓 美人つてただ立つてるだけでいいよね（一）（前書き）

さて、と。

最初の辺はやつぱりギャグありで、それからだんだんシリアスに…  
…が銀魂スタイルですよね。多分。

よし書いハ。

## 第一訓 美人つてただ立つてゐただけでいゝよね（一）

じめじめと雨が降る、インテイ・ペントンスターの朝。

「おはよひゞやこまーす」

万事屋の従業員　　といふと聞こえはいいが、実際はただの雑用・ツツコミ役以外の何でもない物悲しい少年、志村新八は今日も元気に出勤する。

「おー、新八か。入れ入れー」

朝っぱらから低すぎるテンションと低すぎるノリで、苺牛乳のストローを加えながら手招きする銀時。その隣では、神楽が酢昆布をくつねやくつねやと歯みしめてくる。

9

「いや…あのや、苺牛乳と酢昆布の匂いが混ざって、空気がすゞいよどんでるんですけど…」

「気にしないのが一番ネ、新八。これが万事屋のアロマアル」

「うそ、違つからね。こんなアロマが充満してたら、誰も来ないかよどんでるんですか…」

新八は一通り突っ込んでから、ソファに座り、茶を入れた。

「それで銀さん、来月の生活費どうあるんですか？このまま依頼來

なかつたら、食べてけませんよ」

彼は銀時に声をかける。

すでに五月も下旬、であるにもかかわらず、今月の収入はゼロ。家賃すら払えないかもしれないのに、銀時と神楽に緊張感というものはほとんど見受けられない。

「大丈夫ネ。世の中、みんな何とかなるようटてできてるアル」

「そーだぜ新ハ。今までだつてなんだかんだ言いながら乗り切つてきたじやねーか、この漫畫も。何度打ち切りの危機に陥つてきたことか」

言ひながら銀時は、じろんとソファに横たわる。ますます不安を募らせる新ハ。

「てか、その打ち切りの危機を脱することができたのは編集部の努力のおかげですからね！アンタら何も努力してないじゃないですか！これじやあ、いつまでたつても貰ひ暮らしですよ」

しかし銀時は、いつものことながら、新ハの忠告をむりと無視。

「あーあ、何か面白いことねーかなー。例えばよ、オメー。玄関開けたら裸の美女が立つてたりとかしたら、一発…」

「その前に、アンタの頭を一発殴りたいですね」

新ハは冷ややかに言い放つた後、酔昆布の空き箱で巨大な城を作つてゐる神楽に向き直つた。

「それと神楽ちゃんも！酔昆布だつて、いくら単価が安いつたつて、そんなたくさん買つたら大赤字だからね！空き箱だけで要塞できるし！」

「ふーつふつふつふ。悪の帝王の孫娘の婿のいとこの飼つてる犬のおもちゃになつてゐるダメガネをやつつけるには、これくらいの設備が必要ネ。覚悟するアル新ハイイ！…！」

神楽が傘を掲げ、「突撃！」と叫ぶ。すると即座に、定春がキバをむいて新ハに突進してきた。

「あやああああああ！」

定春に噛みつかれた新ハは、頭部から血を流しながら断末魔。やつとの思いで巨大犬を振り払い、「どんだけ大掛かりなボケかましてんの神楽ちゃん！」と声を荒げるが、神楽はへらへらと笑つている。

「駄目だ…」なんなんじや、来月はホントに飢え死にだ…」

げつそりする新ハ。その横で、銀時もさすがに思いつめた顔をしている。ああ、やつと真剣になつてくれたか…と新ハは思ったが、

「やつぱな…」いつ、シチュエーションとしては、全裸のなまめか

しき女が「ひへ…」

などとこゝの銀時のつぶやきを聞いて、余計に深いため息をついた。  
その時。

ピンポン、と軽いチャイムの音が響いた。

「ん?…カモが来たか」

待つてましたとばかり、銀時は起き上がりついそそと玄関に向かう。

「いや、来客のことをカモだなんてそんな

いい加減にしてくださいよと言おうとした新ハは、しかし言葉が途切れてしまった。

銀時が開けたドアの向こう…そこには、ほぼ全裸でタオルだけをはおった若い女が立っていたのだ。

全身びしょぬれで傷だらけ。肩まである茶髪からは、血の混じった水が滴っている。

沈黙の時間が流れた。

そして時計の秒針が一周半ほどしたとき、銀時がついに静寂を破つた。

「あのー……そういうフレイならどうかよそでビーリング  
つてオイイイイイー……違ひでしょ、なにかよっぽじあつたんで  
すよー事件とか！」

新ハが顔を赤くしたままあわてるが、銀時はただ鼻をほじつてい  
る。

「あー、そういうアレか、あの、初めての　ピー　が無駄に痛くて  
ベッドを転がりまわつたつていつ…」  
「傷だらけになるベッドってどんなのー？」  
「きつと、切りたての丸太でできたやつアルよ  
「どこの民族？」

新ハは、同僚が次々にボケを連発していくことに罪悪感を感じつ  
つ、おずおずと女を見た。  
残りの2人も、とりあえずは落ち着きを取り戻す。  
そして次の瞬間　女が突然、どこに忍ばせていたのか、包丁を  
取り出した。

「……」

## 第一訓 美人つてただ立つてるだけでいいよね（一）（後書き）

この調子で行つたら、完結までに100話突破しそうで怖いです。

でも大丈夫：なんとかなるわ。きっと……。

**美人ってただ立つてるだけでいいよね（2）（前書き）**

今日、遅めのクリスマスプレゼント貰いました。

それはなんと、自分専用PC!!

よっしゃ、これでもっともっと小説が書けるー！

## 美人ってただ立ってるだけでいいよね（2）

「……」

万事屋メンバーが、そろつて体をこわばらせる。

しかし刃先が向けられたのは彼らではなく、彼女自身の胸だ。

「……いいわ、死ぬわよ……」

銀時が、ほうっと息を吐きだした。

「あはは。新八、俺ビックリしたぜ。殺されるかと思つたもん」「ですよねー銀さん。ははっ、いきなりあんな物騒なモノ取り出するんですから」

「なーんだ、ただの自殺願望者アルかー」「つて……」

3人、もう一度女を見る。

彼女は深呼吸し、包丁をいまにも胸に突き刺そうとしている。

「やめろオオ！！何があつたか知んねーけど、人んちで死ぬのはやめよう！」

「そうですよ！てか、いや、まず命は粗末にしないでくださいー！」「故郷に捨て置いてきたパピーのこと、思い出すヨロシー！」

口々にワーワー、ギャー、ギャーと叫び、なんとか自殺を阻止しようとするトリオ。女は、かなりびっくりしたように彼らを見たが、すぐには険しい顔になつた。

「関係ないわ、最後の頼みの綱のあなたたちに話を聞いてもらえないんだもの……もう死にたい！」

「いや、分かった！俺らが悪かった！話題くから、ついでに最新号のジャンプあげるから死なないでよ！」

銀時が意味のわからないことを絶叫しながら床に頭をこすりつけ  
ると、女は素直に包丁を下ろした。そして先ほどまでとは打って変  
わって、やわらかな微笑みを浮かべる。

「あら。ジャンプくれるなら、皿洗はやめておきますわ」

「いや……ジャンプで引き下がるって、アンタの命どんだけ軽いん  
ですか……」

新八が半眼になつてツッコむと、女はとたんに唇をキッと結んだ。

「いいわ。私、死

「なないでくれよな」

銀時が彼女からすばやく包丁を取り上げ、新八に命令。

「オイ、すぐ服もつてこい

「はい」

新八は奥に引っ込むと、ものの3秒でTシャツと短パンを持って  
きた。かぶき町マラソン大会でもらった、新品だ。

「どうぞ！あの、そこ、廻りますんで、着替えてください。あ、

ホント、申し訳ないですけど、あの、下着はなくて、えっと…」

女の機嫌を損ねたら大変だと、じどうもどろ廁の場所を説明する新ハ。そんな彼に、女はっこりと笑いかけた。

「結構よ。どうも、ありがと」

女は一礼すると、タオルを翻して廁に入った。それからすこしへて、がちゃりとドアが開く。

「お待たせしたわね」

大人びた口調でそう言つ彼女の美しさに、万事屋3人は息を呑んだ。

濡れた髪にほのかにまとわせている色気に、銀時の喉がごくりと上下する。

そして、次の瞬間。

「ひどいわ…ひどすぎるー！」

大声とともに、女はぼろぼろと涙をこぼし始めた。

「こんな扱い……虫けらみたいな、この扱いつて…私に、死ねって言つてるの？暗にそう言つてるのね！」

言つや否や、再び包丁を 。

「つてちょっとオーサツキ銀さんが預かっただはずでしょその包丁！

なんで！何で持つてるんですか！」

「かまわないでちょうどいい、もう私には…あなたみたいな男…」

肩を震わせながら、彼女は自分の首に刃を当てる。

「いや、だから！分かれたカップルみたいなコント、しなくていいですか～！」

つばを飛ばす新ハ。彼をなだめるように背中をぽんぽんと叩くのは神楽である。

「まあまあ、新ハ。女は出会いと別れを繰り返して大きくなるものネ」

それに続いて銀時も、「そーだぜ、女ってのはなア、自殺しちまいたくなるほど」の失恋を通じて、大きくなるんだ。……乳が

などと言つ。

「乳つて何で…?ビンだけ欲求不満なんですか」

新ハは疲れた目で銀時を見てから、女に向き直つた。

「あの、…確かに下着なしつて、そんな扱い僕らだつて申し訳ないと思つてはいるんですけど……でも、自殺だけは」

「…そんなんじゃないの」

彼女はかぶりを振り、真っ赤に泣き腫らした目で新ハを見た。瞳には、深い悲しみ、そして、言葉では表現しようのない絶望が渦巻いている。

「そんなんじゃないのよ、私は、私はね……」

青紫色の唇から、憂いを帯びた吐息と嗚咽が絶え間なく漏れる。沈みきつた空気が、彼女の周りを満たしていく。

「おい、ネーちゃんよ。んな辛れ一話なり、無視に疠れなんて言わねエよ。ただな…命は無駄にしちゃいけねエ」

銀時が、静かで、それでいてよく通る声で、女を諭した。

「な? 無理に言つ必要はねエから…」

「…………。ちやんと、言わせていただきわ」

女は数秒の間を取つた後、意を決したよう、元気、いつ告げた。

「このTシャツ…」サイズよ!私、そんなにテープに見えるかしら?  
?ひどい!」

「いや知らねエよー何その小さすぎる恼み!」

即座に切り返す銀時。しかし女いわく、

「小さくなんかないわ、大きすぎるのよ!」

「大きいつて何だ。それ恼みのサイズじゃなくてTシャツのサイズ  
だろ!」

「そうよ、Tシャツが大きすぎるのよー屈辱よこれは!」

「それだったらノーパンのほうが屈辱なんじゃねーの!?」

「いいえ、Lサイズのほうが屈辱よ。死ぬわよー!」

「あつそ、じゃあ勝手に死ねや」

「つひオイイイイー銀さん何言つてんの!死なせないでくださいこよ

!」

馬鹿なやり取りを繰り返したあと、銀時はふはーっとため息をついた。

「んで? とりあえず、アンタが依頼入つてこつたな

「はい」

彼は女をまじまじと見詰めながら、おもむろに神楽にこうひじた。

「例のあれ、持つてこい」

「はいアル!」

神楽は、戸棚のほうにトタトタと駆けていく。

「例のあれって何ですか?」

新ハがたずねるが、銀時は無視。

「僕だけハブか……」

悲しそうな呟きも、無視。

うなだれている新ハと、罪の意識もなく平然としている銀時のところに、神楽が戻ってきた。

「銀ちゃん、これでいいアルか?」

手にしているのは、1枚の書類。

「おー、それでよし。んじゃ、まあこっち来て、必要事項を書いてくれ」

銀時は女にソファを勧め、向かい合つて座った。新ハと神楽も、その横に腰を下ろす。

「これが、依頼申込書だ。名前と住所を、この欄に  
「はい」

申込書なんてあつたっけ？」と新ハは思つたが、ここには黙つておいた。銀時は説明を続ける。

「そして電話番号とメールアドレス、生年月日。あとは……ここに、  
バスト・ウエスト・ヒップ」

と、ここに新ハは我慢できずツッコむ。

「ちょ、銀さん！何考えてんの？一発殴つていいですか？一発いい  
ですね！」

「駄目だ、テメーは一生童貞でいる」「  
一発つてそつちじやねエ！」

銀時と新ハが軽く言い争つているその横で、女はとこつと、

「なるほど、ここにスリーサイズを。B…89。W…58。H…  
「何で鶴呑みにしてるんですかアナタ」

「あら……書かなくていいの？」

「当たり前でしょ。お名前と依頼だけしていただければ、仕事しま  
すから」

良心的な新ハが言つと、銀時が舌打ちをした。「空氣読めよバカ」とその口が言つてゐるが、対して新ハも、「アンタこそまじめな商売してくださいよ」と無言で反論した。それはともかく。

「……私の名前は、竹中蘭冥、歳は24。あなたたちに依頼したいの

は、弟の搜索よ

## 美人つてただ立つてゐるだけでいいよね（2）（後書き）

自分のPCがあるつて、いいですね  
気分がいい。執筆も止まらない！！

あ、それと蘭冥って、「らんめい」って読むんですよ。  
戦国時代に活躍した竹中半兵衛さんをもじりました^\_^

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9221z/>

---

白夜叉再臨

2011年12月31日22時52分発行